



MORIOKA
ROTARY CLUB WEEKLY

第25回例会(1月24日)
令和2年1月31日発行

クラブ事務所 岩手県盛岡市菜園1丁目10 会 長 西島光茂
川徳デパート内 幹 事 勝 雅行
例 会 場 同上 TEL 019 (651) 1111(代) 会 報 金沢 滋
例 会 日 毎週金曜日12時30分～ クラブ事務局 TEL 019 (653) 5682
http://www.morioka-rc.jp/ FAX 019 (653) 5622

RI会長テーマ ROTARY CONNECTS THE WORLD:ロータリーは世界をつなぐ...マーク・ダニエル・マローニー
盛岡RC会長テーマ 一令和元年:世の為、人の為、奉仕を続け、輪を繋げましょう-西島光茂



ゲスト卓話

こんなにすごい、岩手の漆 漆の現状と将来性

株式会社浄法寺漆産業 代表取締役

松沢 卓生 様

1. 県職員から起業

私は盛岡市出身で、2009年に岩手県職員を退職して起業しました。当時漆の担当になったのがきっかけで、漆器そしてウルシの木そのものに魅力を感じ、文字通り身も心もかぶれてしまいました。漆を商う事業者は全国各地にあります、国産漆のみを扱う会社は現在弊社のみです。

日本の漆生産の状況についてご紹介します。平成28年のデータになりますが全国生産量の75%が岩手県産です。935キログラムと1トンを切っておりますが、漆を大量に生産している産地は岩手だけです。第二位が茨城県の147キロ、第三位栃木県120キロと続きますが、ダブルスコア以上の生産量です。一方で、国内で使われている漆のほとんど、約97%が中国からの輸入です。国産はわずか2%程度で、わずかです。これは今に始まったことではなく、明治時代からこのような状況になっています。一番の原因は中国産漆が安価であるということです。

漆産地は岩手県北の二戸市浄法寺町が中心です。漆掻き職人が山に入り早朝から夕方まで漆を取り続けます。このような風景は県北ならではのものです。この殺し掻きという方法は越前地方(現在の福井県)が発祥の地で、この技術が全国に広がったもので、浄法寺にも福井から移住した子孫の方がいらっしゃいます。6月から10月までの約半年間で漆を取り尽くして最後は伐採します。漆掻きができるようになるまでは約15年木を育てなければなりません、漆が取れるのは最後の年だけで、わずか牛乳瓶一本分、約200ミリリットル

●スピーカー紹介●

岩手県庁の職員だったが、岩手の名産品である漆と関わっているうち、岩手が漆の生産をやめてしまうと、日本の伝統、漆器は消えてしまうという危機感から起業家に転身し、株式会社浄法寺漆産業を立ち上げる。

自ら現場に入って奮闘しながら、漆製品のプロデューサーとしてJR東日本の豪華寝台列車「TRAIN SUITE四季島」の客室内装や、トヨタ自動車「アクア」の塗装など、一流企業とコラボレーションし、漆の美と機能性のPRに成功。また、5グラムという少量から購入できるよう、小さなチューブで漆の販売や漆塗りの車のハンドルや時給を施したスマートフォンケースなどの独創的な漆商品を次々と生み出し、2011年、2013年、2016年とグッドデザイン賞を受賞し注目を集める。

2018年、文化庁から発表された、重要文化財の修復プロジェクトに必要な国産の漆の量が足りないため、漆の収穫量を上げる研究でも先陣を切って積極的に取り組んでいる。漆という伝統を守り、広めながら、日光東照宮や金閣寺・中尊寺など歴史的建造物の修復を陰で支えている。

程度を採ったら終わりです。それくらい貴重です。木に回復期間を与えるため3日休ませてまた傷をつけます。そうして採取した漆の量は一人前の職人で約75キログラムです。漆は全部同じような品質と思われがちですが、職人ごとに流儀が違い、木の性質や天候、土壌などにも左右されるので千差万別でまるでワインのようです。

国産漆と中国産漆の違いは、ウルシオールという主成分の割合です。国産は約70から80%含まれていますが、中国産は60%台です。これをもって品質が善い悪いとも言えないのですが、国産の方が耐久性があり色艶が素晴らしいと言われてます。輪島塗などの高級な漆器の仕上げにも欠かせませんし、皇居や国宝などの修理にも使われます。短所としては国産の方がなかなか乾きにくいという特徴がありますし、なによりも中国産の4倍の価格です。ただ、中国産もどんどん値上がりしています。

昨年、沖縄の首里城が焼失したのはショッキングな出来事でしたが、その再建計画が進められて

おり、今後大量の国産漆が使われることとなります。また、地元の中尊寺金色堂や金閣など金箔を貼る建物にも接着剤として漆が大量に使われていますし、今後このような文化財を保護継承していくためには漆が絶対必要になりますし、他の素材に替えることもできません。平成27年2月に文化庁から文化財建造物修理には国産漆を100%使用する原則が示されたことで、国産漆の需要が一気に高まりました。それまで在庫となっていた浄法寺の漆も全部売れてしまい、全く足りない状況になっています。文化財建造物の修理修復だけで1年間に2.2トンの漆が必要なのですが、現在は増産傾向にあるとはいえ1.4トン程度にとどまっています。しかも他の文化財修理や漆器などの製作にも使われますので、実際は年間3トンくらい必要ではないかと推測されます。

2. 新しい漆の採取法開発

安定供給するためには漆生産量を増やさなければなりません。江戸時代から続いてきた漆掻きの手法では限界があります。漆掻き職人も原木量も不足しています。今から木を植えても採取できるのは15年後。季節労働である漆掻きは就労の場としては非常に厳しいので、当社では新しい漆採取法の研究に着手し、沖縄高専の協力を得て衝撃波破碎技術を使った装置を開発しました。これにより漆採取の生産性を高め、漆掻きの手法に依らず漆を採ることができます。

漆は精製しなければ商品になりませんので、ゴミを濾したり攪拌して水分をとばす精製の工程を経てチューブ詰めにして販売しています。5グラムから200グラムまでのラインナップで小分けにしています。2011年のグッドデザイン賞特別賞を受賞しましたが、デザインに対する評価というよりは活動に評価をいただいたと思っています。

漆はサステナブルで環境負荷が少ない資源です。紫外線で完全に分解し、一方で9000年前の縄文時代の遺跡から漆塗り製品が発見されるなど、防腐蚀性、耐久性、耐酸・耐アルカリ性に優れています。塗料のほか、接着剤や充填剤としても使える万能の素材です。

当社は浄法寺塗のお椀や箸を企画販売しており、わんこきょうだいのお椀など大変好評です。名入れも可能で、引き出物や記念品のご注文も承ります。また、漆塗りのネームプレートを製作し、県庁で採用されています。海外では、輸出した漆

を使った高級万年筆が製造販売されています。地元では盛岡市菜園のPENというお店で浄法寺漆を塗ったボールペンが販売されており、岩手日報にも掲載されましたが、1本3万円台にもかかわらず多くの注文をいただき、納品まで半年待ちの状態です。トンボ鉛筆のボールペンをベースに塗っているため、替芯の心配もなく普段遣いのボールペンとして愛用している方が多いです。

また、最近では乗り物に塗装する機会が増えました。JR東日本のTRAIN SUITE四季島の客室内装に漆塗りのパネルが採用されています。デザイナーの奥山清行氏が内外装を手掛け、全部の客室がスイートルームになっており、そこに黒い漆と赤い漆で塗ったパネルが嵌められています。とても高級感のある内装です。

自動車ではトヨタ自動車のアクアに塗りました。ボディではなくスポイラー部分に黒い漆を塗り高級に仕上げましたが、漆は紫外線に弱いので本来はあまり良くありません。また、石がはねたり泥もつきます。ですので、漆を塗るのは内装の方をお勧めしたいということでこのような高級なハンドルに漆を塗ったものを提案しています。伊藤若冲という江戸時代の塗師の屏風絵をモチーフにしています。シフトノブなど手に触れるところに漆を塗ると触り心地がとても良いのです。滑りにくくしっとりとした馴染む質感は機能性もあります。

このような金属など異素材への塗装はこれまであまり行われてなかったのですが、岩手県工業技術センターが開発した「分子接合技術」を使い、漆との密着性を高めたことで様々な素材に塗ることが可能となりました。このステンレスのハサミもそうですが、岩手町に工場のあるハサミメーカー東光舎さんとのコラボレーションで、アニメ柄を漆で装飾したものを伝統工芸の展示会に出展して好評を得ました。海外から注文をいただいています。

3. “注目”と漆の不足

漆は海外から注目され始めています。昨年春にスイスの工芸家の団体が岩手を訪問し、漆工房を見学したり実際に漆を使ったワークショップを行いました。漆はとても可能性があるとして高く評価され、当社と現地の職人とのコラボレーションが始まりました。

このように、従来の浄法寺塗のほかに新たな用途が増えてきたことから、漆不足は喫緊の課題と

なっています。浄法寺漆はその大半が文化財修理修復に使われていることから供給に余裕がありません。そのため、自前で漆を確保することが不可欠となりました。3年前から三田農林さんの協力をいただいて盛岡郊外でのウルシ苗木の生産をはじめ、2年前からは上米内地区でのウルシ植栽を開始しました。参加する方々はボランティアで、全国各地から集まります。昨年は日本航空さんやJR東日本さんの社員の方々も参加していただきました。ウルシを植える活動は数ある植林活動の中でとても珍しいですが、緑を増やすだけでなく、明確な目的、目標があつての植栽です。

ウルシの種は発芽率がとても悪く、蒔いても10%程度しか発芽しません。表面が硬い口ウに覆われており、それを強制的に硫酸などで溶かさなければなりませんし、栽培が難しい植物の一つです。ですが、岩手県内各地にかつてはウルシの植栽地があり、身近な木として育ててきた歴史があります。それをまた復活させたいと考えています。この活動は東北、日本全域に広がっており、特に福島県飯館村は放射能で汚染された地域で、除染した後の土地はまったく問題なく肥沃な土壤なのですが活用策に悩んでいたところ、ウルシは可能性があるのではないかとということで、地元の方々と共に試験的に植栽をはじめました。このようにウルシに関心のある地域が広がりつつあります。今までは輪島など漆器の産地でウルシを植える活動が多かったのですが、現在はまったく漆器とは無縁の地域が手を上げ始めています。

日本航空さんから協力をいただくきっかけとなったのは、同社の「新JAPANプロジェクト」で、全国各地の自治体の魅力を高め地域活性化に貢献したいという思いから岩手県特産の漆を応援したいという企画が発端でした。JALマークの入ったお椀セットと酒器セットを製作し、機内誌に掲載されたところ完売する人気商品となりました。お椀セットは飯椀と汁椀がセットになっており、漆塗りの飯椀でご飯を食べると一層美味しくなると好評をいただきましたし、酒器セットは日本酒専用の画期的な形状で、盃の一つがJALをイメージした赤の漆で塗られています。一方、漆をめぐる課題としては国産漆が足りないという深刻な状況がありますので、そちらについても同社は真剣に支援策を検討いただき、社員有志がウルシの種を購入し、自宅で1~2年育て、将来岩手での植栽

イベントに持ち寄って植えていただくということになりました。昨年日本航空本社で販売したところ、赤坂社長自ら種をご購入され、役員の方々からも積極的に宣伝していただきました。

地元では盛岡の酒蔵・菊の司さんの大吟醸古酒と当社の盃をセットにした「膠漆の交わり」を企画し、クラウドファンディングにより資金を集め商品化しました。膠漆の交わりとは、膠や漆のように一度くっつくとなかなか離れないような固い結びつきのことをいいます。特製の白い盃で美味しいお酒をいただくことやみつきになること間違いありません。

4. 脱プラスチックの流れに

漆は素材としても改めて見直され始めています。環境省が主導する「プラスチックスマート」という取り組みで漆の活用が取り上げられました。プラスチック容器ではなく漆器を使いましょうという提案のほか、紫外線で完全に分解され海洋汚染の心配がない漆の良さをPRしています。世界的にSDGsへの関心が高まり、脱プラスチックの流れが加速化していますが、日本はまだ立ち遅れています。漆という日本ならではの素材をもっとPRしていきたいです。そこで我々が仲間と一緒に提案しているのが、100%漆で製作したカードです。見た目はプラスチックのクレジットカードですが、乾漆という技法で作った薄い板を貼り合わせて作っています。ICチップを埋め込むことができ、決済カードとしても使えます。これも紫外線で分解するので、環境負荷を与えず、高級感のあるカードとして各方面で紹介しています。

最近新聞やニュースでも取り上げられたのですが、JR山田線上米内駅の駅舎を改装して漆工房とカフェを作ろうという計画を進めています。クラウドファンディングで資金を募り、それを元手として今年の4月までに改装するのですが、地域の方々のご支援が欠かせません。米内浄水場の見事なしだれ桜以外に名物が特にないことから現在取り組んでいるウルシ植栽の活動と連動させ、駅を中核にして賑やかにしたいと考えています。盛岡市内から車で20分程度とほど近く、自然豊かで典型的な里山の地域です。宮沢賢治が訪れた高洞山からの岩手山の姿は素晴らしいの一言です。

このように、漆に関する様々な活動を行っていますが、漆器だけにとどまらない大いなる可能性を秘めています。地元ほどその魅力に気づかな

い、とよく言われますが、漆もそうです。高くて面倒でかぶれる、というイメージを払拭し世界に誇れる漆の産業を作り上げていきたいです。ぜひ

皆様にも日頃から漆、漆器に親しんでいただき、その魅力にかぶれていただきたいと思います。

例会報告

第25回例会
令和2年1月24日(金)

- 12時30分 開会点鐘
- ・司会 西島光茂会長
 - ・ロータリーソング
(それでこそロータリー)
 - ・ゲスト 松沢卓生様
(榊浄法寺漆産業 代表取締役)
 - ・会長報告 西島光茂会長
 - ・功労者表彰
ロータリー財団マルチプルフェロー:
西島光茂会員
 - ・皆出席バッチ 下道利幸君(1年)
 - ・入会祝 盛田洋太郎君
 - ・結婚祝 海野 尚君
 - ・幹事報告 大平騰一副幹事
 - ・委員会報告

【他クラブ例会変更のお知らせ】

- 盛岡北R.C.=
2月19日(水)クラブ協議会のため
夜例会に時間変更
- 盛岡中央R.C.=
2月18日(火)通常夜例会
12:30~ 時間変更
2月25日(火)賀寿例会のため
18:30~ 時間変更

【ニコニコBOX】

- ◆中村芳樹君…東京海上日動盛岡支店は今月岩手県での開業75周年を

迎えました。1945年1月10日の開業の2ヶ月後にはB29の空襲があるなど苦難の船出でした。75年のご愛顧に感謝してニコニコします。

◆星 伸寿君…テーブルにおいたチラシですが、盛岡東ロータリー NTTドコモの田中和裕会員が、2/6にセミナーを開催します。5Gをはじめとする新しいテクノロジーを岩手でものように役立てていくか、全国での事例をご紹介します。達増知事、東大森川先生、ドコモの吉澤(岩手大OB)も登壇します。ご興味があれば、ぜひご来場下さい。岩手で新しい技術が活用され、便利な社会になっていくことを願いニコニコします。

◆飯塚 肇君…①東日本大震災の翌年、2012年に「病院近くの第二の我が家」として開設した「あいアイハウス」は昨年末までに、大人395名、子供88名、合計483名のご家族のご利用をいただきました。心臓に欠陥をもって生まれた新生児の手術で、走ってこられるところで待機するご家族の利用がほとんどでしたが、岩手医大附属病院の矢巾町への移転に伴い「病院近く」ではなくなり、ご利用がなくなりました。

ご家族はなによりも近いことを優先され、敷地内のホテルを利用されているものと思われます。「あいアイハウス」は一定の役割を果たしえたと判断し、この1月

末日をもって閉じることにいたしました。

これまでの皆様の温かいご支援や、認定NPO法人いわて子育てネットへのご寄付に感謝しご報告いたします。

②全豪オープン、大坂なおみは1回戦、サーブでネットを壊し、「ごめんなさい。」と謝り、2回戦では技巧派の相手に翻弄されて、いらついでラケットをコートにたたきつけ、さらに蹴飛ばして「ヨネックスさん、ごめんなさい。」と謝り、2試合連続で謝り続けて3回戦に進みました。

今日の5時からの3回戦突破を願ってニコニコします。

◆西島光茂君…①前回の例会終了後に家に帰ってGovernor's Monthly Letterを開きましたら、Report欄に盛岡シティマラソンでの盛岡RC私設エイド設置の記事が報告されておりました。荒川鉄平社会奉仕委員長さん有難うございました。『水!』ではダメで、『補水!』と声かけすると、寄ってくれました。声かけは大切だと、感じた次第です。②松沢卓生様、漆の話有難うございました。漆器をJapanという話も聞いたことがあり、楽しく聞かせていただきました。HPには植樹の話もあり、クラブとしても興味深いと個人的に思います。

- メイクアップ
クラブ委員会=畠山・長野・荻野・佐々木(憲)君

出席報告

会員数/77名

出席数/44名

出席率/60.27%

前々回/73.97%



プログラムのお知らせ

- ・1月31日(金) ゲスト卓話 高橋雪文様(ベル特許事務所 弁理士)「弁理士について」
- ・2月7日(金) 新入会員卓話 安川慎治会員
- 14日(金) 第3回クラブアッセンブリー
- 21日(金) 創立記念例会
- 28日(金) 卓話
- ・3月6日(金) 卓話

●本号編集担当/福田 荘介